

賦何木連歌百韻

(電腦網千句第四)

自 二〇一二・四・二一

至 二〇一四・三・三〇

於 サイバースペース

待つほどに深山も花のさかりかな

樂歲

霞をわけて春の旅人

千草

かたらひの長閑になれる船路に

梢風

風のすがたの見ゆる川上

蘭舎

月影を碎くさざ波音もなく

夢様

すすきの露をこぼすまつむし

歳

やや寒に炊ぎの煙ほの青く

草

子の声さはに山裾の秋

風

一裏

ひのくれは里のけはひもやはらかに

舎

途切れがちなる木魚漏れくる

梯

五月雨の堂降り籠むる平泉

歳

はなたちはなの香るたまづき

草

忘らるること忘れ得ぬもの千々に

風

またねの枕なほも恨みつ

舎

生き霊となりて繫がむこの先は

梯

こがね争ひおくれとりたり

歳

つぎなるはかの燕の子安貝

草

霞より生まれいづる白船

風

むかしはという身の春の暮れそめて

舎

さしかけられし傘のうれしさ

梯

月今宵あひみる人の美しさ

草

かひなにつつむ手枕の秋

歳

二表

携へて辿る野末の露しとど

梯

こゆべき山に鹿ぞ鳴くなる

舎

しづのをの学ぶこころの尊けれ

風

ふでかみすずり墨の清らか

草

ゆゑありて船を送るとふみの来て

歳

つはものつかさ額をあつめる

梯

吹きむすぶ月影しろき枯野中

舎

風におされて鷹のあゆめる

風

うたびとの心ほがらにありぬべし

草

のどけき空のまためぐり来ぬ

歳

何処へか雲間をよぎり竜の影

梯

国の蛙は戦はじむる

舎

盗まれてぬすみ返せし花の池

風

たはむれに画を描く僧正

草

経読むは歌も連歌もあきたゆゑ

歳

気儘な旅に立出づる夢

梯

朝焼に遠きみやこをまた思ふ

舎

水の匂ひの夏をのせくる

風

行く川のがが笹舟のあやふげに

草

きみぞたよりと離さじの袖

梯

恋はみな峰にさかるるちぎれ雲

歳

奥のしぐれを何と見るらむ

風

関の戸は尋ねまほしき白河の

舎

牧はおぼろにをちこちの駒

草

ふはふはと絮を飛ばして鼓草

梯

筆はすすまず永き日も暮れ

歳

たたなづく霞の中にうかぶ月

風

たゞほのかなる空木（うつほぎ）の影

舎

三表

鐘の音敷ふるうちのうたた寝に

草

心の緒ろのやがて解けゆく

様

ひさびさに山のいで湯のほととぎす

歳

ひと雨あれば田を植うる日に

風

物縫ひて結び忘れし糸の尻

舎

やごとなき名をいただきし猫

草

たまゆらの出会ひに胸の高鳴りて

様

やがて二道かくる今様

歳

言の葉に吹く風裏と表見せ

風

よきもあしきも霧にまぎれて

舎

真葛原うねりの果に灯の幽か

様

月と鼓とこころ一つに

風

古の聖をしのぶ柱にも

草

我にかへれば霜のおとをひ

舎

三裏

明くる夜の鶏の凍れる声をきく

苗の空に何を祈らむ

きたへたる玉の鋼を研ぎあげて

ふつのみたまの太刀ぞ畏し

富士に添ふ浦はいづれもかたちよく

松の緑に煙ひとすじ

野点する釣釜の声風の声

いらへのどかに尼たちのえみ

近衛には八重に七重に花車

にほひいたらぬ里はあらじと

秋しぐれ丘の錦をかけおける

日々細りゆく蟋蟀のこゑ

満ち欠けの不思議を月に問ふてをり

父母知らず十七となり

歳

梯

風

草

舎

歳

梯

風

草

舎

歳

梯

風

草

名表

常夏のはつかに匂ふ比翼塚

舎

ひとへぎぬにも移り香のこく

歳

声低きものをこはがること久し

風

とぼそを叩くかぜの暮れ方

歳

旅立ちの詠を猫にもねんごろに

草

けふはきのふのあだし身にして

舎

流れゆき変りゆく世々飛鳥川

梯

いを捕りながら後生いのらめ

風

夕霧のはれゆく彼方月ありて

歳

願ひの糸の紅のひとすぢ

草

逢ひ見てののちのまことか思ひ草

舎

茶の香残れるをだまきのもひ (盃)

梯

鳥声に似たる翁のうとまれて

風

枯れた泥田で蓮根振る日々

歳

名裏

曼荼羅のかたじけなさを伏し拝み

草

しきみの枝の香にむせびつゝ

舎

ひとつ鐘峽にひびかせ彼岸へと

梯

水の清らを映す朝日に

風

泉よりせせらぎ早瀬やがて海

歳

たなごころより飛びたてるてふ

草

ふり返り見れば一村花の雪

舎

ただ吹き透る春惜しむ風

梯